

マーク・ロスコと一九三〇年代のアメリカ

《キーワード》WPA（公共事業促進局） ザ・テン

芦田彩葵

はじめに

抽象表現主義と呼ばれる画家たちは、特定の芸術理念や様式を有してはおらず、その明確な定義づけは困難である。敢えて共通項を探るのであれば、彼らの多くが、ニューヨークで活動、一九三〇年代に恐慌下のアメリカ政府がニューディール政策の一環として実施したWPA¹の芸術家救済事業に参加、表現主義のモチーフやキュビズムの絵画的空間の超克を目指し、四〇年代に独自の様式を確立したことが挙げられる。特に一九三〇年代は、個々に制作に励んでいた若い画家たちが、多くの仲間を得、ともに議論をしていくなかで、自らの芸術観を形成していく契機となる貴重な時代であった。しかしながら、三〇年代という時代がロスコの制作活動にどのような影響を与えたかについては、これまで具体的に指摘されてこなかった。そこで、本稿では、抽象表現主義の萌芽が芽生えた一九三〇年代のアメリカ社会と美術の動向を辿

るとともに、三〇年代後半にロスコが参加していたグループ「ザ・テン」の活動について、アメリカ美術アーカイヴに収められている関係者へのインタビュー資料を中心に検証しながら、当時の状況が画家として自らの表現を模索中であったロスコにいかに関与を及ぼしたかについて考察する。

一、一九三〇年代のアメリカ社会とWPA

一九三〇年代は、前年に起こったウォール街での株価暴落に端を発する大恐慌による重苦しい幕開けであった。特に、二〇年代の好景気の下においても苦しい生活を送っていた芸術家たちには大打撃を与えた。アメリカは一九二〇年代には既に世界最大の工業国になっていたのだが、その過程で工業化が進められ、各地で工場が立ち並び始め、地方都市の風景は均一化されていった。また、合理化の促進により、地方都市は大都市に吸収され、権力も

地方から中央政府や大都市に集中されていくなかで、人々は農民的性格を忘れ、アメリカの地方にあった伝統的農業や田園風景は姿を消しつつあった。しかし、大恐慌によりアメリカの繁栄は著しく衰退し、人々は産業主義による機械万能の日常ではなく、古き良き時代のアメリカの風景への郷愁に駆られるようになる。トーマス・ハート・ベントンやチャールズ・バーチフィールドらをはじめとするリージョナリストの画家たちは、かつては自らも染まっていたヨーロッパ美術への追従を否定し、アメリカ独自のものとして自分たちの土地に根付いている情景や、敬虔に慎ましく生活する人々、アメリカ的な農村風景を描き、当時の人々の心を掴むことに成功した。その一方で、過去を懐かしむのではなく、労働者階級の実生活や現実に起こった事件を題材に描くことで、アメリカ社会の歪みや政府の政策を糾弾する社会主義リアリズムが台頭した。その代表的な画家として、サッコ・ヴァンゼッティ事件を描いたベン・シャーンやウィリアム・グロツパーらが挙げられる。右派のリージョナリズムと、左派の社会主義リアリズムは、政治的見解では反対の立場をとっていたが、表現様式では再現主義的である点において通じていた。美術界では、このリージョナリズムと社会主義リアリズムが主流となっていたが、『カイエ・ダール』や『ドキュマン』を読み、表現主義やキュビズムなど国際的な芸術運動に刺激を受けながら、新しいアメリカのモダンイズム芸術を模索する若い芸術家たちにとって、この二派はもはや時代遅れの美術と映っていた。その一方で、この混迷の一九三〇年代において、前衛的な抽象美術の非社会性についても非難さ

れ、美術においても社会的機能を付与させる必要があるという考えが増しつつあったことも事実である。特に、この考え方は、ニューヨークで活動する若い芸術家たちに顕著であった。

一九三〇年代、ニューヨークの若い芸術家や作家たちは、彼ら自身の都市生活の現実や、社会主義の価値観を反映した新しいアメリカの文化を創造することを望んでいた。また、この三〇年代においては、ニューヨークの急進主義的芸術家や作家たちは、文化の改革は政治改革に拠っていると信じていた³。この思想の発信地となったのが、ジョン・リード・クラブである。ジョン・リード・クラブは、急進的な雑誌『マッシズ』に詩などを発表し、左派的雑誌『ニュー・マッシズ』の創刊者⁴、編集長としても知られるロシア系ユダヤ人の作家、政治ジャーナリストのマイケル・ゴールドを中心に、一九二九年に創立されたマルクス主義について研究するグループであった。会合では、美術史をマルクス主義的弁証法によって検証しようとするメイヤー・シャピロの姿も見られた。『マッシズ』の記事には、ジョン・スローンやスチュアート・デイヴィスなどの画家たちが、『ニュー・マッシズ』にはウィリアム・グロツパーやオットー・ソグロフなどの画家たちが、挿絵や時事風刺画を描いていたことから、両誌は多くの芸術家たちに読まれていた。この背景も相まって、芸術家たちは社会や政治問題に敏感であり、ジョン・リード・クラブの会合にも頻繁に出入りしていたのである。彼らはこのような環境に身をおくことで、ますます芸術と社会の関係性について意識するようになっていった。

